

4.3.7 オジロワシ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があつたものは 45 メッシュであつた (図 4-35(1))。本種は県内では冬鳥であり、繁殖情報はない。

確認場所は北上山地の太平洋側や北上川流域、松島湾、仙台湾の河口部、山間部のダム湖、内陸部の湖沼群・河川等であつた。このうち、志津川湾から女川湾にかけての沿岸域や北上川流域では、まとまつた生息域が認められた。また、内陸部の湖沼群や山間部のダム湖では、複数の場所において生息確認の情報があつた。

前回調査と比較すると、前回調査及び今回調査のいずれも情報があつたものは 24 メッシュ、今回調査のみ情報があつたものは 21 メッシュ、前回調査のみ情報があつたものは 25 メッシュであつた (図 4-35(2))。今回調査で確認された場所は、前回調査とほぼ同様に北上山地の太平洋側や北上川流域、山間部のダム湖、内陸部の湖沼群・河川等であり、今回調査で新たに確認された場所は、松島湾や仙台湾の河口部であつた。また、前回調査で確認された牡鹿半島や内陸部 (県中部) の河川等では生息情報がなかつた。今回調査で確認されなかつた場所は、水域の規模がダム湖等と比較して小さい場所であり、一時的な利用であつたと考えられる。

これらから、オジロワシについては、北上山地の太平洋沿岸域や北上川流域のほか、内陸部の湖沼群や山間部のダム湖も重要な越冬場所と考えられる。

なお、県内における本種の生息数について、東日本大震災前後を比較すると (図 4-35(3))、北上山地の太平洋側 (図中①～⑤) と内陸部の湖沼群周辺 (図中⑥) のいずれも、大きな変化はみられなかつた。また、第 2 章に示したとおり、北上川河口から下流域約 20km の区間では、震災の翌年の冬季 (平成 23 (2011) 年) には確認回数及び個体数が減少したが、その後、平成 24 (2012) 年には回復しており、震災による影響は認められなかつたと報告されている (立花 (2014) ¹⁾)。以上より、本種については、震災による生息地への影響は一時的なものであつたと考えられる。

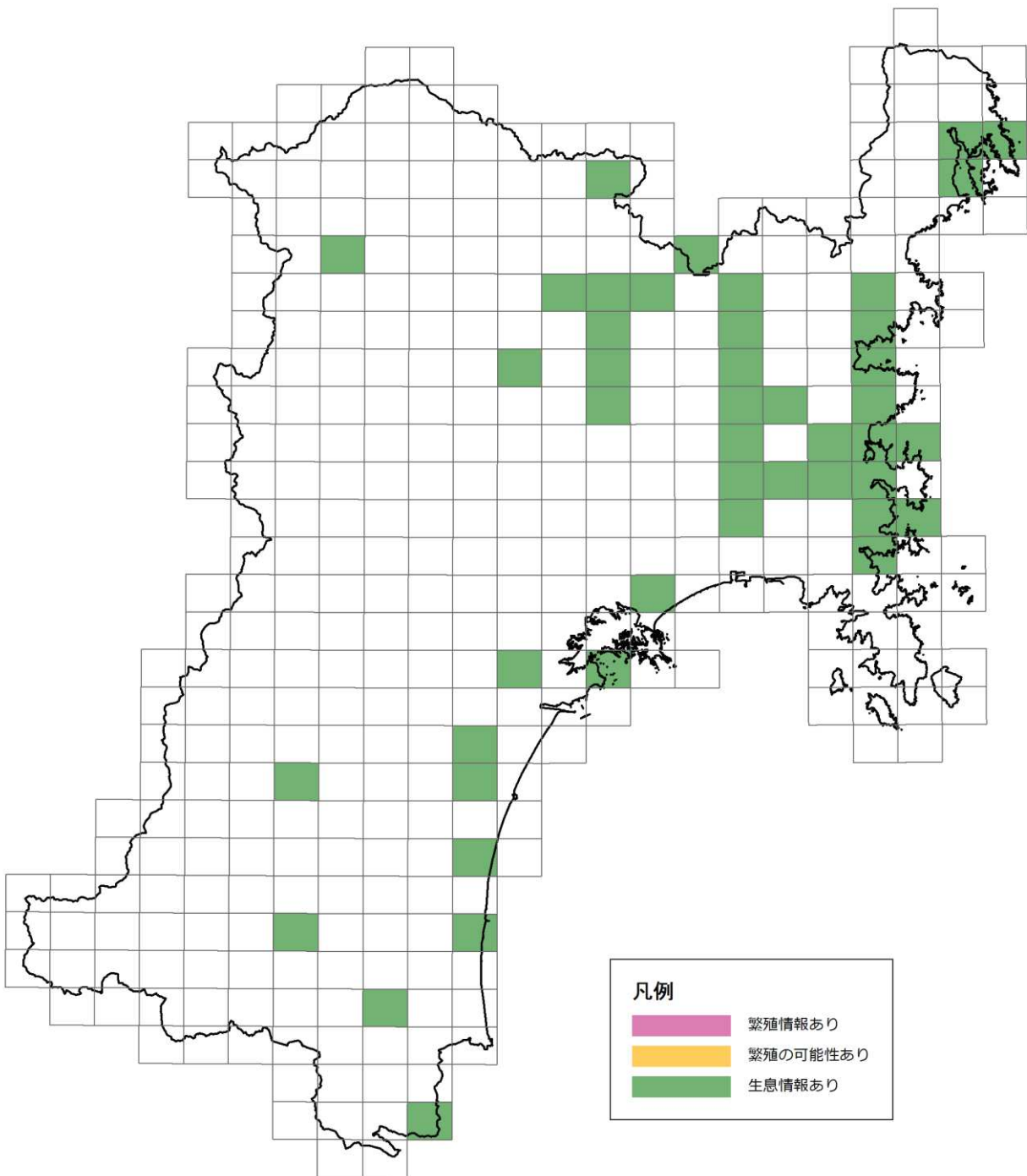


図 4-35(1) オジロワシ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

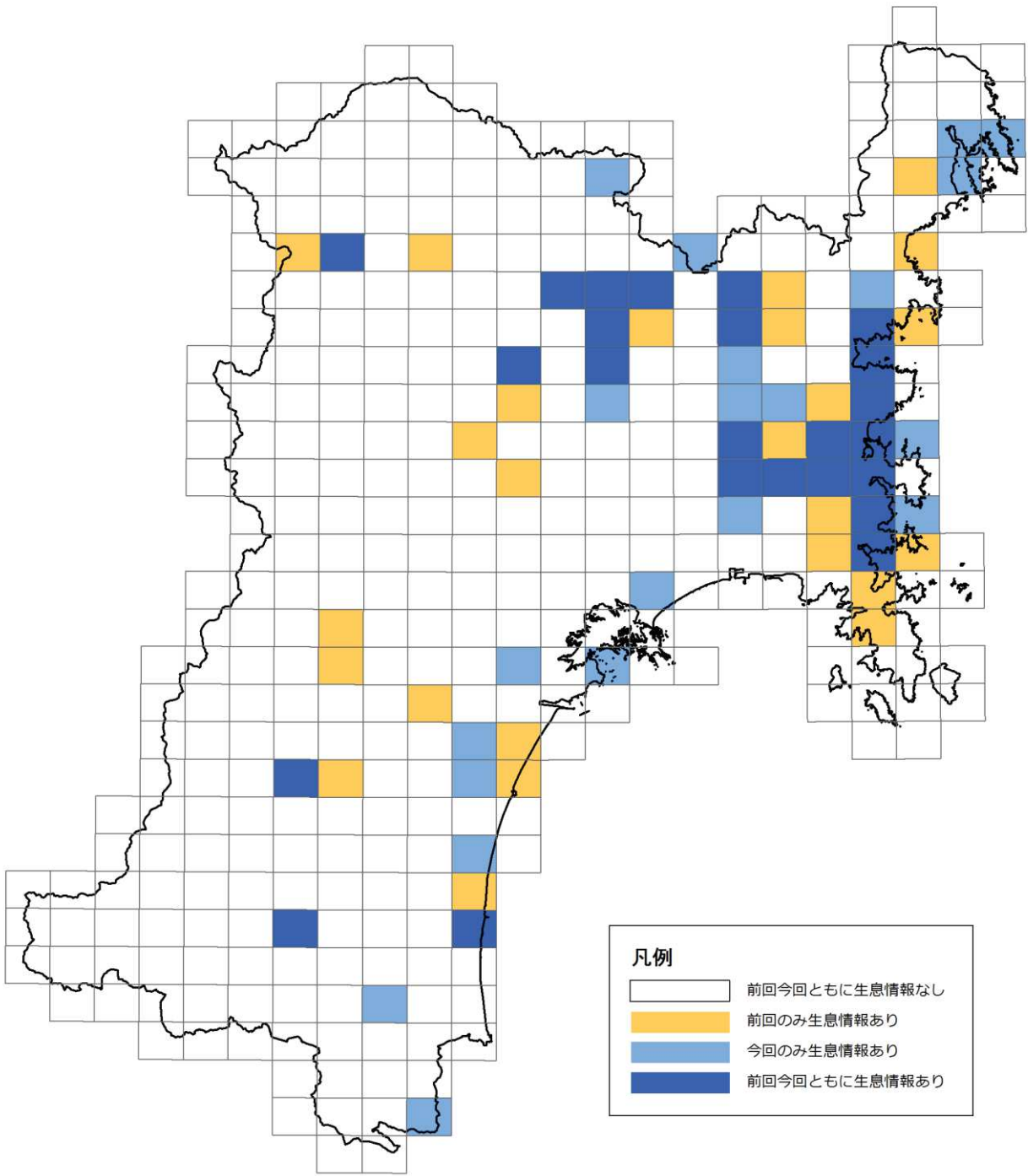


図 4-35(2) オジロワシ：生息情報地域（前回調査結果との比較）

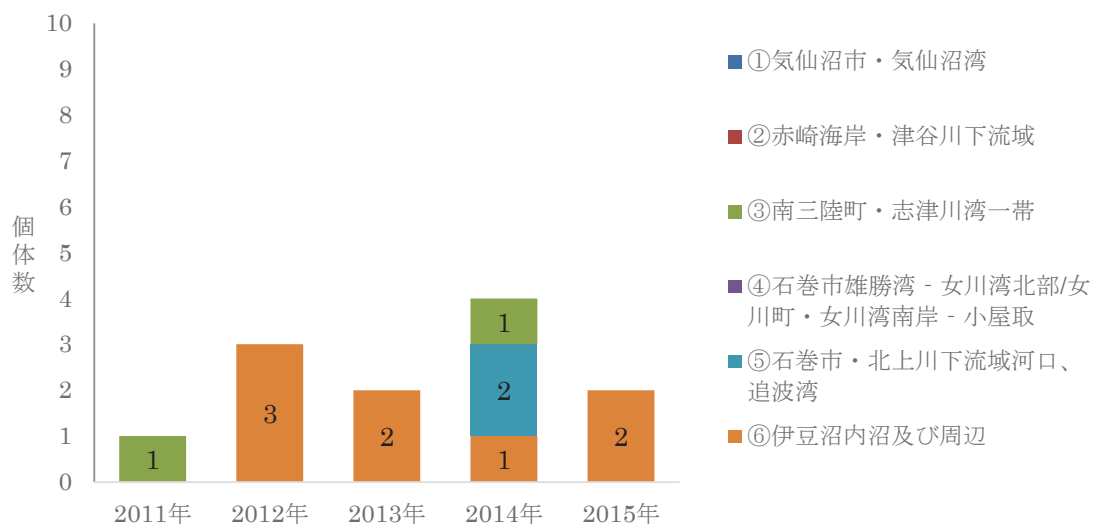


図 4-35(3) 県内におけるオジロワシの生息数の経年変化

※オオワシ・オジロワシ一斉調査（平成 23（2011）年～平成 27（2015）年）による宮城県結果（オジロワシ・オオワシ合同調査グループ，未発表）を利用した。

4.3.8 オオワシ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があったものは 47 メッシュであった (図 4-36(1))。本種は県内では冬鳥であり、繁殖情報はない。

確認場所は北上山地から牡鹿半島にかけての太平洋側や北上川流域、松島湾等であった。

前回調査と比較すると、前回調査及び今回調査のいずれも情報があったものは 20 メッシュ、今回調査のみ情報があったものは 27 メッシュ、前回調査のみ情報があったものは 14 メッシュであった (図 4-36(2))。今回調査で新たに確認された場所は、気仙沼湾周辺や北上川流域 (石巻市周辺)、松島湾、牡鹿半島南部等であり、前回調査で確認された内陸部の湖沼群や河川等では生息情報がなかった。今回調査で新たな確認が増加した理由として、野鳥観察者の増加のほか、震災復興関係や河川水辺の国勢調査等の環境調査の実施に伴う情報量の増加が考えられる。

オジロワシと異なり、松島湾より南側の海岸部や内陸の湖沼群、山間部のダム湖は越冬場所としてほとんど利用せず、主に県北東部のリアス式海岸や背後の山城、松島湾を中心に越冬している。この地域には、魚類の栽培養殖施設が存在するほか、気仙沼港や女川港、塩釜港といった水揚げ量の多い漁港が数多く位置し、餌となる魚の死体が比較的得やすいことと関係があると考えられる。

なお、県内における本種の生息数について、東日本大震災前後を比較すると (図 4-36(3))、北上山地の太平洋側のうち、石巻市雄勝湾～女川湾北部/女川湾南岸～小屋取エリア (図中④) では、震災後に越冬個体数が減少していた。また、第 2 章に示したとおり、北上川河口から下流域約 20km の区間では、震災の翌年の冬季 (平成 23 (2011) 年) には確認回数及び個体数は震災以前とほぼ同様であったが、その後、平成 24 (2012) 年には大幅に減少していた。その理由として立花 (2014) ¹は、主要な食物資源であるギンザケの養殖施設が震災により壊滅的な影響を受けたことを挙げている。実際に、ギンザケ養殖の経営体数や生産量が震災後は大きく減少しており (図 4-36(4)～(5))、漁業関係者の被災に伴うエリア周辺での水揚げ量の減少や栽培漁業・水産加工業施設の被災がオオワシの越冬環境に大きく影響している可能性がある。

以上より、沿岸漁業への依存性が強いとされるオオワシについては、震災による生息地への影響があったと考えられる。

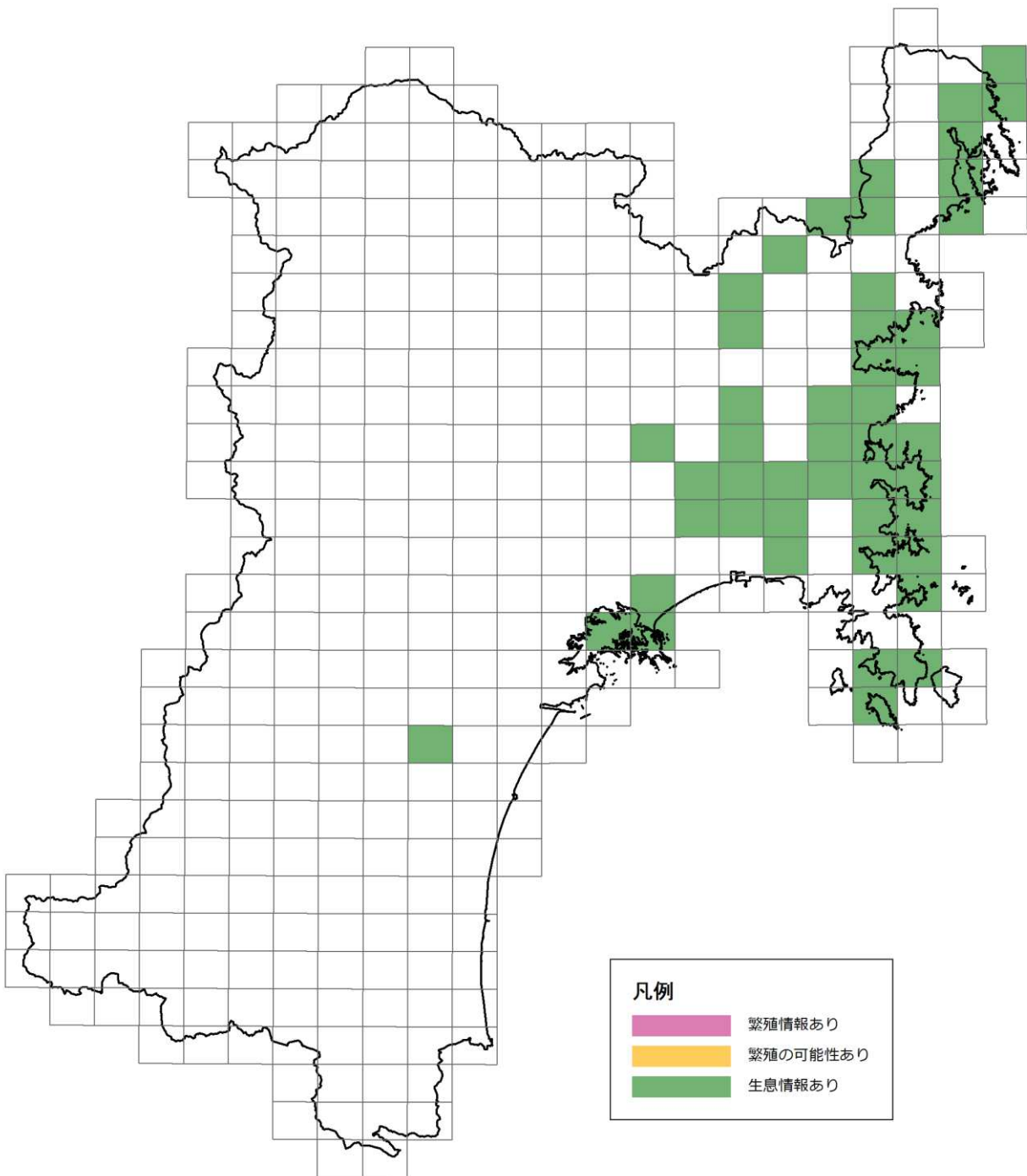


図 4-36(1) オオワシ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

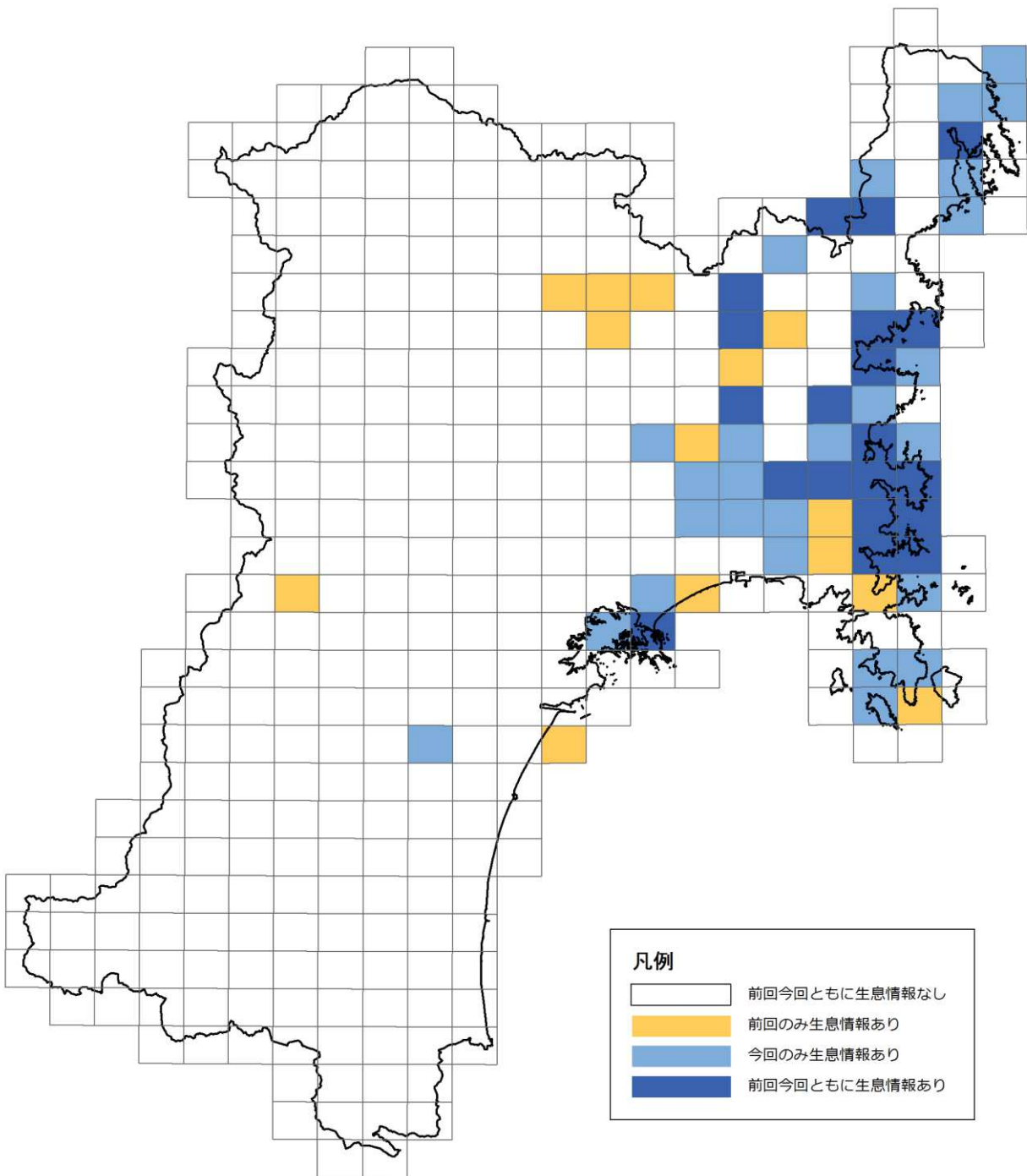


図 4-36(2) オオワシ：生息情報地域（前回調査結果との比較）

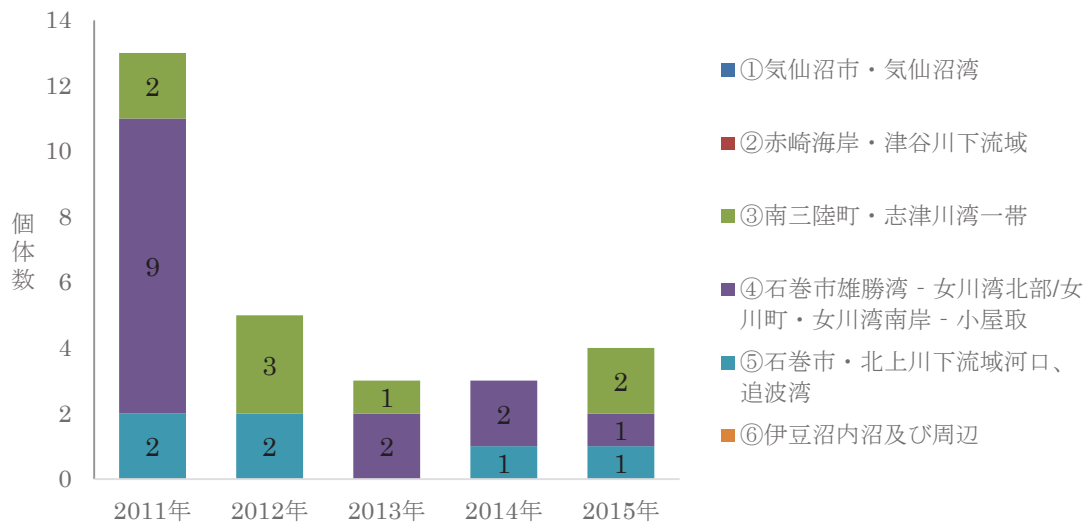


図 4-36(3) 県内におけるオオワシの生息数の経年変化

※オオワシ・オジロワシ一斉調査（平成 23（2011）年～平成 27（2015）年）による宮城県結果（オジロワシ・オオワシ合同調査グループ，未発表）より作成。

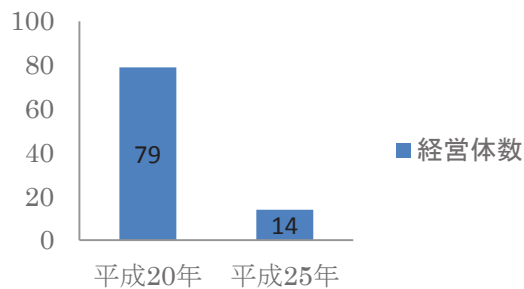


図 4-36(4) 県内におけるギンザケの養殖経営体数の推移

※2013年（第13次）漁業センサス漁業経営体調査結果報告書（宮城県震災復興企画部 2015）より作成。

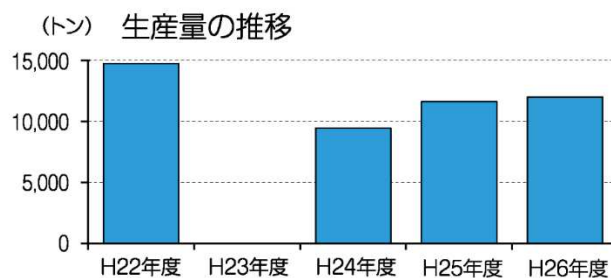


図 4-36(5) 県内におけるギンザケの生産量の推移

出典：宮城の水産業（宮城県 2014）